

平成29年度 第3回インクルーシブ教育（支援児包容教育）委員会 議事録

□開催日時：平成29年3月15日（金）14：30～

□開催場所：駅北庁舎4階災害対策本部室

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 田口明 中野正大 柴田勇夫 廣瀬和信 奥田紳二
丹羽紀一 西村育子 則武里香 市川友博 水野恵美子 高木貴代子
若林恭子 瀨瀬育恵
- ・事務局：木股次長 高橋光弘 安田孔美 小栗妙子 景山裕子 南谷美和 野呂直美

1 あいさつ

木股次長あいさつ

2 報告内容

（1）特別支援教育コーディネーターの専門性の向上について

平成29年度特別支援教育コーディネーターリーダー研修会の報告

① 事務局報告

② 委員意見

- ・5回のリーダー研修会は、大学で行っていた研修プログラムを普及することを考え、大学とタイアップした取組。
- ・現場は複雑で地域性のある中で、リーダー的な先生が実践経験を通して学びを深めていくことが大きな趣旨。
自己課題を決め、焦点化をして取り組んでもらった。
- ・8名のリーダーの報告会では、意見交流を活発に行えた。良い実践を他の先生に知ってもらえる機会ともなった。
- ・充実感のある取組であったことがわかる。
- ・子どもたちへの理解、保護者への理解をもとに、共に歩んでもらえる特別支援教育コーディネーターが育っていくことを期待する。
- ・リーダーは経験豊富な先生方である。リーダーを中心に地域の支援を充実させることができる。
- ・地域で子どもを育てていく取りかかりになる。
- ・特別支援教育コーディネーターは、校内支援を進めていく大きな役割を担う。特別支援教育コーディネーターのおかげで保護者も安心して話すことができる。良い取組を共有することで、良さを互いに取り入れることができる良い研修である。

(2) スマイルブック引継ぎ会の報告

① 事務局報告

② 委員意見

- ・資料だけでなく、対象児のことが分かる機会をつくとよい。
- ・引継ぎ会で保護者の気持ちや一生懸命かかわっていらっしやることが分かる。保護者の気持ちを受け取る大切な機会である。
- ・園の担当者、学校の担当者が参加するので保護者は安心して話ができる。スマイルブックをきっかけに関係ができた。
- ・スマイルブックの引継ぎ会には子どもは参加しないのは何故か。子どもが、「自分のために大人が心配してくれていること」を知る機会とではないか。
- ・保護者の悩みが出てくる場面であるので、関係者のみの参加にしている。
- ・子どもの参加については、保護者の意見を伺ったらどうか。
- ・保護者をご自分で引継ぎができたことに安心を覚える。顔を合わせて話すことで良好な関係を築くことができる。
- ・学校段階間で、できること、できないことが異なる。保護者にも理解してもらえよう話をする必要がある。
- ・意思決定支援という言葉があるように、学校へ入ってからの個別の教育支援計画の策定についても本人の参画が必要である。
- ・保護者の思いと子どもの状態像が異なる場合がある。子どもを中心に保護者と一緒話す機会として大切にしていきたい。
- ・個別の教育支援計画とスマイルブックをリンクさせるとよい。
- ・関係機関の連携を図りスマイルブックの普及に努めるとよい。

(3) 文部科学省委託事業「特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業 指定校1年次取組の報告

① 陶都中学校 特別支援教育主幹教諭 丹羽 紀一教諭より報告

② 委員意見

- ・陶都中学校の試みとしてよいところは、全校的に、全ての生徒さんの自尊感情の向上、学力向上というところから、発達障がいのある子の不登校を減らす、満足度を上げる取組である。
- ・病院の中だけでなく、学校におけるお子さんの姿を見ることができるので有り難いと思った。iPadでの動画を見せてもらうことで、子どもの姿が分かるので、医師としても学ぶことができた。
- ・協働学習の中でiPadを活用していますか。活用方法を教えてください。

(丹羽教諭)

- ・生徒の実態把握、生徒の様子との交流のために教師用の iPad を活用。
- ・協働学習においても生徒用の iPad を活用。例えば、体育の学習で動画を活用して振り返る。

(委員意見)

- ・考えの交流の場面で iPad を使うのは効果的である。
- ・陶都中学校の取組が横へと広がることを願う。実態把握とユニバーサルデザインの授業づくりを、ぜひ、広げてほしい。
- ・不登校は根が深い。魅力ある学校づくりとしての取組を教えてほしい。

(丹羽教諭)

- ・授業や生活が楽しくなるように考えている。
- ・学級活動の一環として「学校満足度」に取り組み、生徒の様子を見届ける。
- ・不登校の要因の一つとして、学習へのつまずきが挙げられる。医療と連携し、適切な支援ができるようにしている。

(委員意見)

- ・授業の楽しさを得られるようにすることが大切。子どもたちが自ら学びたいと思えるような工夫が必要。
- ・市内の不登校の数が増えていることは課題である。子どもが自ら学ぼうとするタイミングが大切。タイミングを見極めないと負担になってしまう。

(委員意見)

- ・満足度調査について教えてほしい。

(丹羽教諭)

- ・1年を6期に分け、期が終わるごとに調査をとる。
「挨拶」「意欲的な学習」「掃除」「仲間づくり」「合唱」「服装身なり」「時間行動」という観点で自己評価をする。「100点中何点」と評価し、ダイアグラムに表す。

(委員意見)

- ・先生方の負担感につながっていないか。

(丹羽教諭)

- ・先生方にとって負担感はないと思うが、生徒の中では苦勞して書いている姿がある。

(委員意見)

- ・インクルーシブ教育推進委員会の中で不登校が話題になることは、貴重である。不登校のことは課題である。
- ・ホワイトボードや iPad で仲間と共有することで互いの頭がよる。そのことで学級の雰囲気がよくなる。学級の中での「所属感」が生まれる。

- ・インクルーシブ教育を取り組むことで、色々な諸課題を解決できる。

3 検討内容

(1) 平成30年～32年 多治見市インクルーシブ教育推進プランの策定

① 事務局説明

第2回インクルーシブ教育推進委員会を受けて見直した点について

② 委員意見

- ・「一人一人の教育的ニーズへの対応」にかかわって。
子どもと一緒に学び先を見学するために半日入学に参加した。特別支援学級の前を何も言わず通り過ぎた。共に学ぶ仲間として、特別支援学級に在籍する生徒がいるので、仲間にも紹介をしてもらえるとよい。そうすることで、「一緒に学ぶ」という気もちをもてるのではないかと思った。
- ・「就労を見据えた本人・保護者への情報提供」について。
福祉就労施設では、重度の方もいらっしゃる。就労ということになると、特別支援学校の児童生徒の方のことも考えなくてはいけない。特別支援学校の児童生徒たちの子どもについて話題にしてほしい。障がいのある方はたくさんいらっしゃる。その方たちを巻き込んでいけるような取組があるとよい。

(事務局)

- ・議会で不登校にかかわる質問があった。不登校の生徒が学校を卒業した後の支援はないかという意見があった。学校卒業後を見据える必要がある。引継ぎ、連携の中で、卒業後の先を考えようとする教師の姿勢がみられる。皆さまのご意見を参考にして課題に取り組んでいきたい。

(委員意見)

- ・就労先の仕組みは複雑である。福祉就労施設の現場の話聞く機会があった。小中学校に携わる者は、就労先を見学し、卒業後に期待されることを、少しずつ力を付ける必要があることが分かった。先を見ながら教育をしていかなければいけないと思う。
- ・就労を考えると、特別支援学校のお子さんのことも考えなければならいが、設置者の関係があるので難しい。「地域で生きる」という視点を持ち、インクルーシブ教育の中に盛り込むとよい。
- ・「居住地校交流」として特別支援学校の児童が運動会へ参加した。自分たちの住んでいるところに特別支援学校へ通っている子がいるということを知る機会なるし、保護者のつながりももつことができる。
- ・「居住地校交流」については、通常学校からの働きかけが必要。
- ・学校から離れて、地域の産業、地域の方の力を発揮できる場所を生かしていけるような場所をつくることも考えるとよい。
- ・学校経営に位置づけ、学校教育力を上げていくことを明示するとよい。

- ・「教育資源」の組み合わせについて説明してください。

(事務局)

- ・学校にある特別支援教育にかかわる資源を組み合わせ、お子さんの教育的にニーズに対応すること。学校にある教育資源を活用することでお子さんの支援を充実させること。

4 今年度のまとめ

- ・どの子ども大切にしていける教育に心がけたい。
- ・「学び方の違いに応じた支援」、「医療、福祉の連携」が、不登校の生徒支援の手がかりとなることが見えてきた。
- ・「基本施策1」にかかわり、保育園でも個別の教育支援計画を作成し、保護者と合意形成を図ることを始めた。保護者と共に支援の在り方を検討することの大切さを感じている。
- ・園学校間の連携をとり、子どもにとって適切な就学の場を考えたい。
- ・就労まで見据えて保護者と話し、情報提供をしていきたい。
- ・子どもが成長にかかわってたくさんの人の理解、協力があったので、安心できた。周りの保護者が安心できるよう情報提供していきたいと思う。
- ・ここ数年で教育現場は変化している。子どもが困っていること、保護者が困っていることは違う。子どもを中心に、引継ぎ、支援の検討をしてほしい。自分のことを考えてもらったことが、子どもの自信となると思う。
- ・重い障害の方が就労できるようにと考え福祉就労にかかわってきた。市が所管している部分でのインクルーシブ教育が進展してきたと実感している。多治見市全体の障がい児・者にとってのインクルーシブ教育が話し合われることを期待する。
- ・就学前のお子さんを支援する立場として、多治見市の教育について情報提供し、保護者の安心感を与えられるようにしていきたい。スマイルブックの活用が広がるように連携をしていきたい。
- ・発達障がいのある子はいろんなお子さんがいる。理解については、深まってきてはいるが、まだまだ課題はある。もっともっと子どもたちが楽しい学校生活を送ることができるように。
- ・多治見市でインクルーシブ教育を推進していくことを期待しています。

5 事務局からのお礼

6 閉会のあいさつ 木股一朗次長